

中国地方・弥生セトルメントシステム

酒 井 龍 一 *

Yayoi Settlement System in the Chugoku District

Ryuichi SAKAI

はじめに

本稿では、日本海沿岸（響灘沿岸～丹後半島）における弥生拠点集落の分布状況をもとに、この地の弥生セトルメントシステムモデルを構成し、先に提示した瀬戸内海北岸のセトルメントシステム（酒井1987）と合体させ、中国・弥生セトルメントシステムモデルとして構成する。ただし、これはまだ未熟な仮説モデルにとどまり、より合理的な新モデル構成のため先学諸氏による批判が不可欠である。

日本海南岸セトルメントシステムモデル

日本海南岸において現時点で弥生拠点集落と判断される遺跡、その可能性をもつ遺跡、あるいはその存在が予測される地等に、次のものがある（小野1985、山本編1978・1979、瀬戸谷他1982、その他）。

伊倉・綾羅木郷・下七見・土井が浜付近・湯免・宮寺・宮の馬場・惣の尻一帯・安富・井元・鰐石・江川下流付近・坂灘・土江・野井付近・矢野・原山・欠田・石台・西川津・タテチョウ・法吉・佐田前・古浦・夫手・北灘・中竹屋・目久美青木付近・宮前付近・貝田原付近・晩田・長瀬高浜・松ヶ坪付近・後中尾付近・青島・布勢・湖山・岩吉・万代寺・直波・岡畑付近・浦明付近・駄坂川原・祢布ヶ森・途中ヶ丘・志高・月無、等

弥生拠点集落の分布形態には面的と線的があるが、ここでは典型的な面的分布は見られず、基本的には線の分布をなす（第2図 山陰B幹線）。すなわちセトルメントシステム全体の枠組は、日本海沿岸に沿う一本の長い分布幹線Bと、内陸や海岸に向かう11本の分布派生線で構成される。

分布線上の拠点集落の間隔は、隣接するもの（例えば、綾羅木郷と井倉、西川津とタテチョウ等）、5キロメートル程度＝スパンAのもの（例えば、矢野と原山、タテチョウと石台等）、15キロメートル程度のもの＝スパンBのもの（例えば、綾羅木郷と田島付近、安富と井元等）、30キロメートル程度＝スパンCのもの（例えば、矢野と欠田、長瀬高浜と青島等）のもの、に大別できる（第2図）。実際には分布線上の拠点集落の間隔は多

*理論考古学研究室（平成元年9月30日受理）

様だが、次のように大別しその関係を理解する。

- N 関係 1キロメートル程度の間隔のもの（隣在する拠点集落と日常生活活動圏＝キャッチメントエリア（Vita-Finzi・Higgs 1970）がほとんど重複し、両者の日常関係は極めて強い）
- スパンA 5キロメートル程度の間隔のもの（キャッチメントエリアのある部分が重なり、その端に次の拠点集落がある。1時間程度で往来可能で、両者の近隣関係は強い）太線
- スパンB 15キロメートル程度の間隔のもの（キャッチメントエリアは重複せず、両者とも固有の領域を持つ。1日で往復可能距離に隣の拠点集落があり、ある程度に日常関係を結びうる）細線
- スパンC 30キロメートル程度の間隔のもの（キャッチメントエリアは重複せず、両者とも完全に固有の領域を持つ。1日で到達可能距離に次の拠点集落があり、有事的にしか関係できない）破線

すなわち、分布線上の拠点集落がスパンA～Bで連続する場合、前者では強い、後者では弱い日常生活レベルでの関係を想定できる。スパンCとなると日常関係は希薄となり、有事的関係を可能にする条件にとどまる。

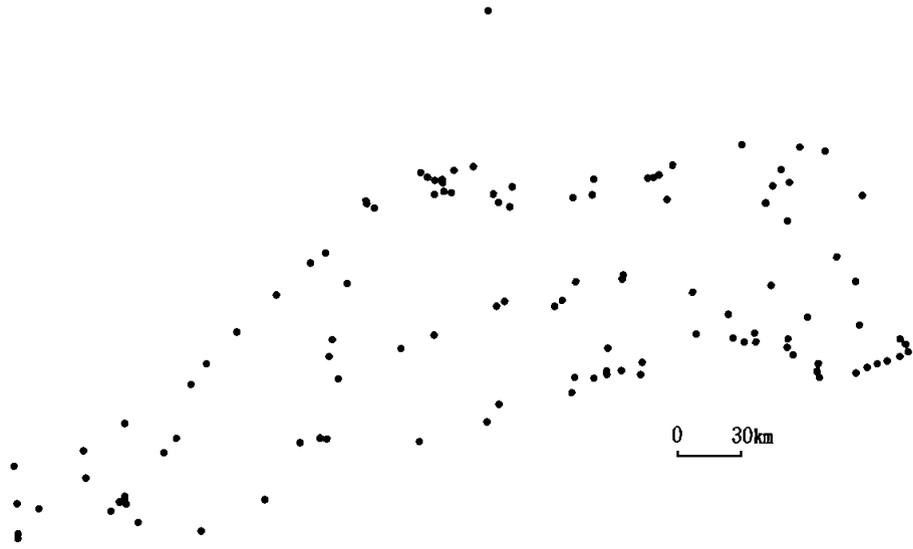
分布線上の何か所かでは複数の拠点集落が集合し、地域システムを構成する。こうした地域は日本海側では次の7個所を数える（第3図）。

- 地域システムI 伊倉と綾羅木郷等が集合する。
- 地域システムJ 矢野と原山等が集合する。
- 地域システムK 欠田・石台・中竹屋・タテチョウ・西川津・法吉・佐田前・夫手北灘等が集合する。
- 地域システムL 目久美・青木・晩田・貝田原付近等が集合する。
- 地域システムM 長瀬高浜・松ヶ坪付近・後中尾付近等が集合する。
- 地域システムN 青島・湖山・布勢・岩吉・直波等が集合する。
- 地域システムO 浦明・駄坂川原・宮内・祢布ヶ森・東家ノ上等が集合する。

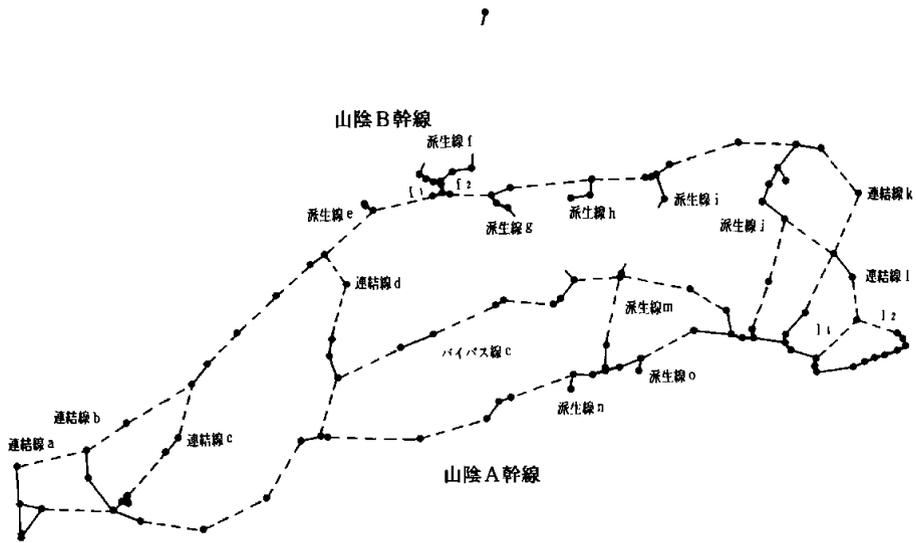
それらは集落の数や間隔や配置形態に個性があり、多様な集合状態を見せる。拠点集落数が最も多いのは松江平野の地域システムKであり、約10集落が隣接・スパンA・B関係で明確な集合体を形成する。これが、西日本海沿岸部における最大規模の集落集合体である。ちなみに、瀬戸内海北岸の最大のものは、岡山平野の地域システムEである。

各地域システム間の関係の程度は、中間に介在する拠点集落の数・間隔・単位数等で把握される。

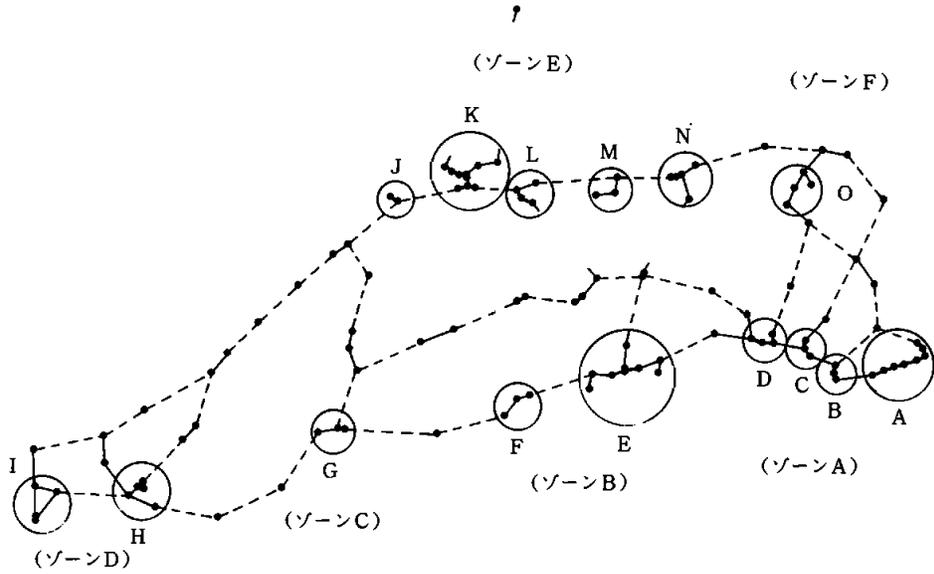
- 地域システムI-J関係 中間に拠点集落9個所があり、その関係はスパンB・3単位+スパンC・7単位である。
その関係は遠い。
- 地域システムJ-K関係 中間に拠点集落がなく、スパンC・1単位で直接に結びつく。



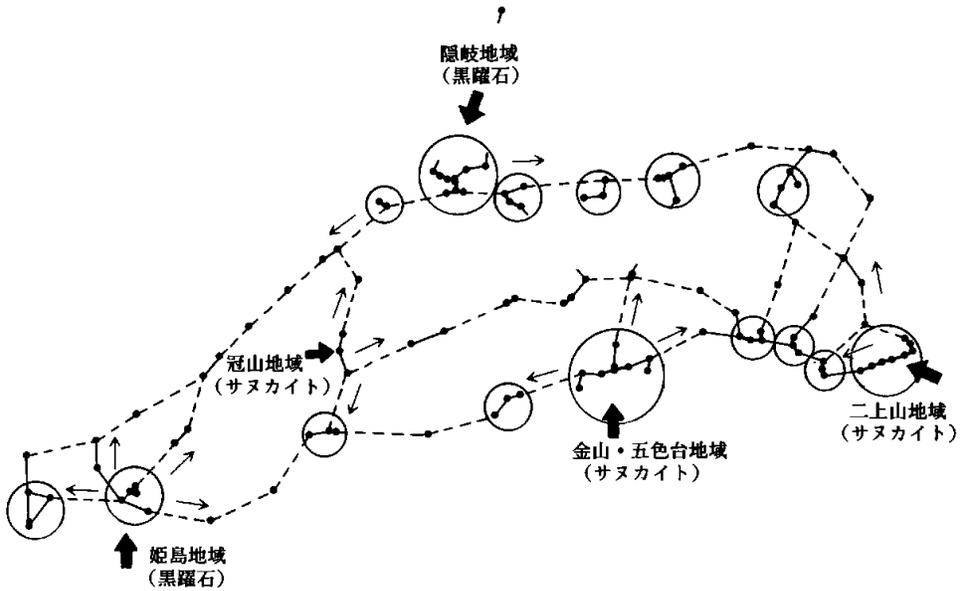
第1図 中国地方における弥生拠点集落遺跡の分布状況



第2図 拠点集落遺跡の分布線



第3図 拠点集落遺跡の集合



第4図 打製石器用石材産出地と移動モデル

地域システムK-L関係	中間に拠点集落はなく、スパンC・1単位で直接に結びつく。
地域システムL-M関係	中間に拠点集落はなく、その関係はスパンC・1単位で直接に結びつく。
地域システムM-N関係	中間に拠点集落はなく、その関係はスパンC・1単位で直接に結びつく。
地域システムN-O関係	中間に拠点集落が2箇所あり、スパンB・1単位+C・2単位で結びつく。

こうしてみると、全体として次の3つのゾーンに区分ができる。地域システムI-J間の間隔は極めて大きく、両者間は10日程度の日数を要する。ここに関係の大きな希薄な空間を認めうる。J~N間は各スパンC・1単位=1日で到達可能な距離で直接に関係し、各地域システム間の横の連結はかなり強い。そして、スパンC・2単位を置くN-O間は2日程度で到達可能な関係にあり、ここにも日常関係のやや希薄な空間を認めうる。

日本海上に位置する島々のうち、最大のが隠岐の島である。この島の南端には拠点集落である月無遺跡が所在する。隠岐の島は、日本海沿岸部における打製石器の主要素材である黒耀石を産出し(東村1986)、日本海沿岸部のセトルメントシステムと極めて強い関係をもつ。地理的条件から、隠岐の拠点集落・月無は、地域システムJ・K・Lとの直接的な関係が想定される。これと対応し、海岸部からやや離れる地位システムJとKは、海岸部に向けた派生線をもつ。それらとは、直線距離にして80キロメートル程度を隔てた関係にある。

日本海沿岸・広域システムの南方、中国山脈を隔てて瀬戸内海北岸部・広域システムがある(酒井1987)。この中国山地中にも拠点集落が点在し、そのいくつかは両者を結ぶ中継点の役割を担っている。B幹線から内陸への派生線の多くは、A幹線との連結線となる(第2図)。

連結線a	無田-下七見
連結線b	湯免-宮寺中村-旦-中郷 スパンB・2単位程度で、地域システムHに至る。
連結線c	安富-宮ヶ久保-帯-馬場杖拔-亀山 スパンB・1単位+C・2単位で、地域システムにHに至る。
連結線d	土江-野井付近-牛塚原付近-横路付近-塚迫付近-太田川放水路 スパンB・2単位+C・3単位で、地域システムGに至る。
派生線e	矢野-原山-出雲大社 スパンA・1単位で海岸に至る。
派生線f	石台-タテチョウ-西川津-法吉-佐田前-古浦 スパンA・4単位で海岸へ至る。 西川津-夫手-北灘 スパンB・2単位で海岸へ至る。
派生線g	目久美-青木付近-貝田原-? スパンA・2単位だけ内陸へ延びるが、分布線は続かない。
派生線h	長瀬高浜-松ヶ坪-後中尾-?

派生線i	スパンB・2単位で内陸へ延びるが、分布線は続かない。 布勢等—万代寺—？
連結線j	スパンB・1単位だけ内陸へ延びるが、分布線は続かない。 浦明—駄坂川原—祢布ヶ森—車家ノ上—筒江片引—福本—今宿丁田 スパンA・2単位+B・3単位+C・1単位程度で地域システムCに至る。
連結線k	志高—七日市—岩山—天神—常本 スパンB・1単位+C・3単位で、地域システムBに至る。
その他	

中国・弥生セトルメントシステム

これを、先の瀬戸内海北岸・弥生セトルメントシステム（酒井1987）に合体させる。その結果、中国・弥生セトルメントシステム全体の基本的な枠組は、拠点集落の分布幹線A・B+バイパス線C+連結線a~fで構成される（第2図）。

日本海側の幹線AはスパンC・17単位程度の規模で構成され、そこには1日到達関係以上の断絶空間を置かない。一方、瀬戸内海側の幹線B全体もスパンC・15単位程度で構成され、そこにも1日到達関係以上の断絶空間を置かない。バイパス線Cも、同様に、スパンC以下の間隔で拠点集落が点在し、内陸において東西方向に最小限度に有事的な関係が結べる条件を構成している。

枠組の連結各所には、拠点集落の集合体である地域システムが15箇所A~Oがあり、他にもその様相を見せる箇所もある。典型的なものは、幹線AにおいてはA~Hの8か所、幹線BにおいてはI~Oの7か所がある（第3図）。

中でも、幹線A上の地域システムEと、幹線B上の地域システムKは集合する拠点集落の数が多く、それぞれ瀬戸内海北岸と日本海沿岸における中核となっている。歴史的には後日、前者は吉備の中核として、後者は出雲の中核として展開する。しかし両中核間は、日常レベルで強い関係を結ぶ拠点集落の分布は少なく、かつスパンも大きい。弥生中期時点では、両者間に直接的で強い連結線を認めることはできず、むしろ日常関係レベルでは断絶帯が存している。幹線AとBを結ぶ6本の連結線は、地域システムH・Iにかかる3本、地域システムGにかかる1本、そして地域システムB・C・D-O間にかかる3本があり、各ゾーンにおける南北の重要な交通路となっている。

このような弥生セトルメントシステムの枠組上を交通路として、各種の人間・生産物・情報が様々に移動し、各部分が機能したと考えられる。ここでは、打製石器用素材の産出地とその移動モデルを提示し、その一端を理解する（第4図）。

中国地方で使用される打製石器用の主要石材の産出地は、次の5か所（東村1986）である。産出地Aは畿内中央部の二上山（サヌカイト）、Bは四国北岸の金山（サヌカイト）、Cは周防灘の姫島（黒耀石）、Dは中国山脈中の冠山（サヌカイト）、そしてEは隠岐（黒耀石）である。先に構成したセトルメントシステムの枠組と重ねると、それぞれ矢印の方向へと第1次的に移動し、更に集落分布線に乗って第2次的に各方面へと移動していくと理解される。

おわりに

以上、これまでのデータと認識を踏まえ、中国地方・弥生セトルメントシステムの枠組を仮説モデルとして構成した。これが、瀬戸内海北岸部や日本海沿岸部における文化要素の伝播や各種生産物の移動状況等の理解に、若干でも参考になれば幸いである。しかし、なお未熟な段階に留まり、新たなデータや先学諸氏によるご批判を得て、より合理的な新モデルを構成していきたい。

引用・参考文献

- 東村武信 1986年 石器産地推定法 ニューサイエンス社
 榎本誠一・瀬戸谷皓 1983年 日本の古代遺跡 2 兵庫北部 保育社
 出雲考古学研究会 1978年 出雲平野の集落遺跡 古代の出雲を考える 3
 前島己基 1985年 日本の古代遺跡 20 島根 保育社
 前島己基・名越 勉 1979年 さんいん古代史の周辺 中
 野田久男 1983年 日本の古代遺跡 9 鳥取 保育社
 小野忠熙 1985年 山口県の考古学 吉川弘文館
 小野忠熙編 1986年 日本の古代遺跡 30 山口 保育社
 酒井龍一 1987年 瀬戸内海北岸における弥生セトルメントシステム 文化財学報
 第5集 奈良大学文化財学科 57-67
 瀬戸谷皓他 1982年 但馬の弥生式土器 但馬考古学 第1集
 八雲立つ風土記の丘資料館 1978年 古代の石見 特別展図録
 山本 清編 1978年 さんいん古代史の周辺 上 山陰中央新報社
 1979年 さんいん古代史の周辺 中 山陰中央新報社
 Vita-Finzi,C.,Higgs,E.S. 1970 Prehistoric Economy in the Mount Carmel Area
 of Palestine, Proceedings of the Prehistoric Society 36

Summary

This paper shows a Yayoi settlement system model at Chugoku district in Japan, and which is constructed by observing the distribution of main archaeological village sites in the region.